

# 「えー」と談話の性質 —独話データを中心に—

## Japanese Filler "EE" in Discourse

小 出 慶 一\*

### 1. はじめに —問題の所在と本稿の構成—

#### 1.1 問題の所在

落語などでは、その冒頭に「えー」が現れることが多い。

- 1 えー、酒百態と申しまして、酒飲みにもいろいろ癖のあるものでございます。

（五代目柳家小さん、1981）<sup>i</sup>

これは何も落語に限ったことではない。次の例は、NHK のラジオで放送されている講演形式の番組の冒頭、講演者が話し始めるところである。

- 2 えー、20 世紀のイギリス小説をご紹介します。きたこのシリーズの最終回、第 13 回に当たりますが、今日は、あの、えー、カズオ・イシグロの『日の名残』をご紹介しますと思います。（小林章夫、2007）<sup>ii</sup>

このような講演類の冒頭に「えー」が現れることは多く見られるところである。「えー」を使わないと、唐突な開始という印象を与えてしまうこともある。しかしまた、その一方で、「えー」が出現しない談話も多くある。たとえば、同じラジオでも、定時ニュースでは「えー」が現れることはほとんどない。また、家庭での会話の

中に「えー」が現れることはほとんどない（塩沢 1979 など）。

小出（2008）での検討の出発点は、「えー」がどのようなときに出現し、そこではどのような役割を持つかを考えることだった。そして、3 のように、「えー」がどのような条件下で現れるかについて観察をまとめた。一部修正したものを挙げる。

#### 3 「えー」の出現する条件

- a. フォーマリティの高い場面である。
- b. 聞き手がその話し手の発話を待ち受けている。
- c. その場面での発話権が話し手一人に与えられている。
- d. 内容について準備されている、あるいは、内容形成に見通しがある。
- e. 内容や表現の選択に自由度がある。

しかし、小出（2008）は、北九州市立大学上村研究室（197～98）『インタビュー形式による日本語会話データベース（Hypermedia Corpus of Spoken Japanese）』（以下、HCSJ）のデータをもとに検討を行ったもので、先行研究でも指摘されているように、「えー」は、フォーマリティの高い談話、中でも独話に多く現れると言われる（塩沢 1979、Nagura 1997 など）。その意味では、小出（2008）の対話データ中心の資料では、十分な検討が行えなかった可能性がある。

\* こいで・けいいち

埼玉大学教養学部教授、日本語教育

そこで、本稿では、独話データを多く収集した国語研究所(2008)『日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spoken Japanese)』(以下、CSJ)のデータを用いて検討を行い、前稿の分析の妥当性も検証しようとするものである。また、分析のために使ったフォーマリティ、自由度などの概念の内実についてもいくぶんかの検討を加えたいと考える。また、この稿は「えー」の性質を検討するものであるが、「えー」が出現する談話の性質を捉える概念について考えることと並行的に検討を進めることにしたい。

また、「えー」は、例1のように談話冒頭に現れることもあるのであるが、次の例のように、発話の中に、ある語の母音を引き取って現れる場合もある。

- 4 で、(F その)抽象化の手法なんですけども、  
<咳> (F ま)一つは(F あー)均等深度法と(F ま)(F あ)大袈裟な名前ですけども、(F おー)(F まー)あるルートの概念から深さが(D い)ある定数(A ディー;D)以上である概念を、(F お)深さ(A デー;D)の(F おー)上位概念に抽象化してしまうと。(A03M0005) <sup>iii</sup>

この例にみられるような母音延引フィラーは、例1のように談話に先立って現れるものと、例4のように何らかの表現に後続して現れるものと、2つのタイプがある。小出(2008)では、ここで言う先行型についてしか触れることができなかった。この2つのタイプのフィラーは、同じような役割を持っているのか、この点についても触れたいと考える。

## 1.2 本稿の構成

以下、2節では、談話の流れから見た「えー」の出現位置について観察を行う。3節では、2節の観察を踏まえて、「えー」出現の条件、「えー」

の現れる談話の特徴について検討する。4節では、先行型の「えー」と後続型の「えー」の性質について検討する。最後に、5節で、まとめと今後の展望について述べる。

## 2. 談話の流れから見た「えー」の出現位置

まず、本稿での検討も小出(2008)を踏襲し、「えー」の出現位置ごとにその性格を考えてみることにしたい。CSJのデータを観察したところでは、「えー」の出現位置として、大きく、談話の内容の区切りと連動しているものと、談話進行上の調整のために現れるものとの2つに分けられるように思われる。まず、この2つの観点から「えー」の出現位置を区分し、以下の①～⑥の下位区分を立てた。

ただし、A類の区分は、連続的な単位の上に検討のために便宜的に境界を設定したという性質のものであり、B類の区分についても、談話の進行の局面をどう捉えるかによって見方は異なるもので、あくまで便宜的なものであることをあらかじめお断りする。区分が目的ではなく、目的は「えー」の性質の検討にある。

### 5 「えー」の出現位置

A類：談話の内容という点で、新規なものの冒頭位置に現れるもの

- ①談話の冒頭
- ②談話内の新しい局面の冒頭
- ③新しい情報の冒頭

B類：談話の進行の調整が行われるところに現れるもの

- ④それまでの進行方向からの一時的離脱
- ⑤離脱からの復帰
- ⑥談話の進展に伴って現れるもの

このような分布に見られる「えー」に共通す

る性質とはどのようなものなのかについては、それぞれの区分における用例を検討した後に議論することにした。以下、これらについて順に例を挙げ検討を進める。

## 2.1 A類

### ①談話の冒頭 ―自由度とフォーマリティー

まず、CSJによって、学会発表がどのように始められるかを調べてみると、次のような分布になる。<sup>iv</sup> なお、表中の「φ」は、フィラーが現れていないことを示す（以下同様）。

表1 冒頭にどのようなフィラーが現れるか  
―CSJの場合―

えー	28例 (47.5%)
φ	18例 (30.5%)
えーと	7例 (11.9%)
あの一	2例 (3.4%)
その他	4例 (6.8%)
(計)	59例 (100%)

この表を見ると、学会発表では「えー」で始まるものの多いことがわかる。「えー」か「φ」かで、80%近くが始められることになる。例を挙げる。

6 (F えー) それでは (F えー) (R ××××××××××××××××××××) という題名で発表させていただきます。東京工業大学の (R ××××) です。(F え)まず(F えー)研究の(F え)背景と目的です。(A01M0103)

7 (F え)山脇学園中学高等学校の (R ××)と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。(A02f0082)

一人話のデータとして、これと比較する意味で、2009年6月の衆議院本会議での説明者・質

問者の談話がどのように始められるかを調べたのが表2である<sup>v</sup>。2009年6月の衆議院での本会議開催日数は8日、説明者・質問者数は延べ53名だった<sup>vi</sup>。このうち、「えー」で始めた話者が16人、フィラーが何もない話者(表中の「φ」)が37人だった。ほぼ70%は「φ」だったことになる。

表2 衆議院本会議(2009年6月)での  
説明者・質問者の談話冒頭フィラー

	えー	φ	(計)
6月 2日	1	4	5
4日	0	2	2
9日	4	1	5
11日	3	8	11
16日	2	5	7
18日	0	4	4
19日	5	6	11
25日	1	7	8
(計)	16 (30.1%)	37 (69.9%)	53 (100%)

CSJと比べると、特徴的なことが2つある。

ひとつは、「φ」が多いことである。全体の約70%を占める。特に、「委員長報告」<sup>vii</sup>の場合は、報告開始の表現が決まっているためか、ほとんどフィラーは使われていない。8・9がその例である。

8 ただいま議題となりました承認を求めるの件につきまして、国土交通委員会における審査の経過及び結果を御報告申し上げます。本件は、～。(望月義夫委員長)

9 ただいま議題となりました平成十九年度決算外二件につきまして、決算行政監視委員会の審査の経過及び結果を御報告申し上げます。まず、～。(川端達夫委員長)

委員長報告のような、きわめて定型性の高い、慣習化された形式を持つ場合には現れないのではないと思われる。

これに対して、6月9日は、相対的にはあるが、「えー」の出現が多い。それは、この日は、臓器移植法をめぐる、提案者がそれぞれの立場から自らの見解を述べる日だったためではないと思われる。10が、その例である。

また、委員長報告に対して、「討論」と呼ばれている意見表明などの際にも、「えー」が現れることが多い。委員長報告に対して、発言の定型性が低く、自由度が高い。そのために「えー」が現れたのではないと思われる。11がその例である。

10 え、筆頭提案者の金田誠一さんにかわり、私、阿部知子から、C案の提案理由の御説明をいたします。(2009.6.9 衆議院本会議)

11 え、民主党の松本剛明です。私は、民主党・無所属クラブを代表して、ただいま議題となりました国家公務員法等の一部を改正する法律案について、総理、官房長官並びに公務員制度改革担当大臣に質問申し上げます。(拍手) (2009.6.25 衆議院本会議)

ふたつ目の特徴は、冒頭に現れるフィラーは「えー」だけだという点である。CSJの学会発表などに見られた「あー」「えーと」などは、現れない。また、「えー」そのものも、多くは目立たないように短く言われることが多い。<sup>viii</sup>

学会と国会本会議という発話環境の中に、その違いを生むものが含まれているのだと思われるが、そのひとつがフォーマリティの違いというのではないと思われる。この場合のフォーマリティとは、個人的な事情で生ずる要素を最小限にし、期待されるフォーム(様式)に

できるだけ沿ったものにするということだろうと思われる。

つまり、「えー」は、独話であればどのような場合でも出るというわけではない。先行研究では、「えー」の出現とフォーマリティの高さの関係を指摘されていた(Nagura 1979 など)が、必ずしも、フォーマリティが高いほど「えー」が出現する、という単純な関係ではないように思われる。

この談話の冒頭という点では、対話においても、「えー」の出現は限られたものになる。HCSJの会話では、39の会話例のうち「えー」で開始されるものは1例しかなかった。HCSJでの談話の多くは、次のように始められていた。なお、例の後の(IT f)などは、HCSJのデータ記号である(以下同様)。

12 1 : はじめまして。

2 : はじめまして。

1 : わたくし根津と申します。

2 : あっ、淹本です。

1 : 淹本さん(2 : はい)でいらっしゃるんですか。(IT f)

HCSJの例から考えると、その場面での相互性が高くなると、「えー」の現れる度合いが低くなると言えそうである。ここでの相互性とは、参加者がそれぞれ発話権の行使を保障されており、また、それが実行可能な状態にあるということである。対人的なコミュニケーションの中でも、相互性の高低は変化し、相互性が低い場合には「えー」が現れる可能性がある(例28、29参照)。

## ②談話内の新しい局面の冒頭

### ー予定性と計画性ー

談話は、その開始から終結まで、大小さまざま

まな単位の言語行動、話題などから成り立っていると考えられる。そのため、ひとつの行動から別の行動へ、ひとつの話題から別の話題へと移行していくための推移というものが生ずる。

そして、このような推移と、「えー」の出現が連動していると思われるものが、この区分②である。次の例は、話題の推移に伴って「えー」が現れていると見られるものである。

- 13 (・・・) (F ま)内容に応じて動的に変更すると変化させるという報告をします。(F えー)まず今回(F あの一)実験で用いた<息>学習データーなんですけれども(F えー)(A1991)年の四月から(F ま)九十八年の九月までのニュースを用いました。

(A01M0131)

- 14 (F と)続いて考察です。(F えー)非カテゴリー判断における長さの知覚では日本語・韓国語話者共に共通した一般的な高さ強さの(・・・) (A01F0122)

13 では「～報告します」、14 では「～考察です」などの後続内容を予告することばが先にあり、それに続いて、「えー」が出ている。つまり、「えー」は予定された内容の冒頭に現れていることになる。

そして、これらの例を見ると、ここには、「えー」に続く内容についての、予定性、準備性というようなものがあるように思われてくる。談話が予定のラインに沿って進んでいる、そのことの意識と「えー」とは連動しているのではないか。

次のような「えー」も、この予定に従った発話行動であるという話者の意識を反映するものだろうと思われる。

- 15 発表形式としては初めに背景を述べ音声

資料分析方法を示しパラメーター自動推定の為の前処理について説明して<雑音>終わりにまとめを行ないます。まず(F えー)基本周波数パターンを(A エフゼロ;F 0)パターンと略させていただきます。(A01F0145)

15 の「えー」の後は、用語に関する説明だけで、後続の単位は、13、14 ほど大きくはない。しかし、このような用語の説明は、この発表の準備段階に用意されていたことであろうし、その意味では予定に従った進行という意識を反映していると見ることはできるのではないかとと思われる。

### ③新しい情報(キーワードや用語規定)の冒頭に現れるものー単位の冒頭性ー

A 類の最後の「えー」は、区分①、②より小さい単位の新情報(キーワードや用語規定)の冒頭に現れるものである。区分③の「えー」は、談話構造というようなマクロな構造との関わりは持たないもので、より局所的、ミクロな単位と関わるものである。

16 は「表意」という用語規定の冒頭に、また、17 では「図式化」というものの掲載ページ情報の冒頭に、「えー」が現れている。「えー」がかわる言語的な単位は、「字義通りの意味」「九十二ページの表の通り」という程度の大きさである。

- 16 (F えーっと)表意というのはその一文だけでイメージされる意味(F えー)字義通りの意味という風に解釈いたします。

(A06F0120)

- 17 第二段の内容に対して更に柚の情報を(F え)増やすのが第三段の内容と考えました。(F え)で図式化は(F えー)九十二ページの

表の通りでございます。(A02f0082)

これらも、単位としては小さいものであり、また、談話構造などに関わるものではないが、推移の境界に現れること、さらに予定され、準備された範囲内にあるという点で、②の区分のものと共通した性質を認めることができると思われる。

## 2.2 B類

B類は、談話の進行という観点から見たときの「えー」の出現位置である。

### ④それまでの進行方向からの一時的離脱

#### ー本線の保持ー

談話の中では、話の参考資料として、印刷された文書を読んだり、字幕の文字を読んだりという行動が取られることがある。ある行動から別の行動へ移ると見られるもので、そのようなときに、「えー」が出現する。

まず、音読が行われている時の例を挙げる。18はCSJ、19は国会議事録からの例である。音読部分は、二重下線を付けた部分である。なお、18では、読み上げ部分が長いので、冒頭のみを挙げ、あとは省略した。

18 (F え)例文は荒垣秀雄氏の四季の博物誌から 柚という文章を取り上げます。では読みます。(F え) 一字名の植物は例えばイグサ (以下の読み上げ部分は省略) (F え) この文章は全部で形式(D でん)段落は四つでございます。(A02f0082)

19 岡島政府参考人：えー、じゃ、読み上げさせていただきます。

①えー、野党、政調等の組織を含む、からの資料要求について、②えー、衆、自、国対からの指示。③えー、野党、政調等の、④えー、組織を含む、からの資料要

求などについては、既存の資料をそのまま提出するようなものを除き、⑤えー、各省庁限りの判断で資料を提出すること、することは厳に慎み、⑥えー、自、国対⑦えー、村田、衆、⑧えー、自、⑨えー、筆頭副委員長及び各省庁担当副委員長に、予め相談することと、いうことでございます。

(2008年10月6日衆議院予算委員会、長妻氏の質問への答弁)<sup>ix</sup>

18では、読み上げの開始部に「えー」が現れていることがわかる。    部分の直前の「えー」である。

19でも、    部分の直前に「えー」が現れ、読み上げが開始されている。

また、19は、読み上げ部分でも興味深い現象が見られる。19の読み上げ部分について、どのような文書が読み上げられたのか、国会議事録の書き方を手掛かりに書いてみると20のようになる。( )が使われている部分は、議事録に記された通りである。

20 例 19 で読まれた文書の書式と考えられるもの。

野党（政調等の組織を含む）からの資料要求について  
(衆) (自) 国対からの指示

野党（政調等の組織を含む）からの資料要求などについては、既存の資料をそのまま提出するようなものを除き、各省庁限りの判断で資料を提出すること、することは厳に慎み、(自) 国対 (村田 (衆) (自) 筆頭副委員長及び (…)

ここで19をもう一度見直してみると、タイトル、サブタイトル、( )内の読み、など、形式的な変化のあるところに「えー」が出ていることがわかる。

このような推移と対応して「えー」が現れるわけであるが、このことから考えて、「えー」は、心的な構えについてなんらかの変更を迫られているときに現れ、かつ、その後に現れる内容について、擬似的にであれ一定の了解性を背景に持っているのではないかと考えられる。了解性というのは、その内容を知っている、あるいは理解可能であると考えることという意味である。それは、②・③で述べた、予定性、準備性という内容についての了解と軌を一にするものではないかと考える。

## ⑤離脱からの復帰

④に挙げた、文書の読み上げという行動は、それまでの談話の進行に対して、別の流れを形成するもので、言ってみれば、異質なものである。そして、このような、本来の談話からずれる行動が終了すれば、もとの談話ラインに戻るものが通常期待される。たとえば、④の18は、読み上げが終わったあと、再び発表者自身のことばでの話に戻る発話冒頭に「えー」が現れている。

このような別のラインへの一時的な転換、そこから元の談話ラインへの復帰が行われる例として、言い間違い、読み間違いの例を挙げる。

21 (・・・) 公募、応募を受け付ける予定です。

(ポーズ、約2秒) え [1]、大リーグ、マリナーズのイチロー選手は、一日、ブルージェイズ戦でヒット2本を打ち、7年連続のシーズン 2千本安打まで、あと2本としました。え [2]、シーズン 2百本安打まで、あと2本としました。え [3]、イ

チロー選手は、4打数2安打1打点で、(・・・)。

(NHKラジオ第1放送午後8時ニュース  
2007.9.1)

21では、「あと2百本」を「あと2千本」と間違っ

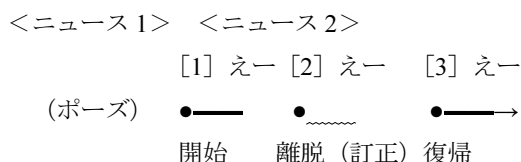
[1]: 前のニュースが終わって、新しい話題が「開始」される

[2]: 読み間違いを修正するために、談話ラインから「離脱」する

[3]: 読み間違いの修正が終わり、再び元の談話ラインに「復

このような「えー」の現れを図式化して示せば、次のようになる。[1]～[3]は、21の文中の数字に対応する。

図1 例21における「えー」の出現位置イメージ



このような行動の推移境界に現れるという性質は、区分④の音読における「えー」についても、見られるものであった。

また、この例では、原稿読み上げ式のニュースであるのに、「えー」が話題の変わり目に現れていることも興味深い点である。21の[1]がそれである。前にも述べたが、ラジオの定時ニュースでは、「えー」の出現は限られているからである。

## ⑥談話の進展に伴って現れるもの

### ー談話における了解性ー

次に検討する「えー」は、これまでのように、有標的な位置に出現するものではない。いわば、位置に関してはこれといった特徴のないところに現れるように見える「えー」である。したがって、B類に入れるのが妥当か問題はあるが、進行に伴って現れるという点で、暫定的に、B類に入れることにした。

22 がその例である。ひとつの発話文の中に「えー」が4つ現れている。そしてまた、このような現れ方は、「えー」にとって、めずらしいものではない。

22 (F え)次に四ということで(F え)今回(F え)発表させていただきましたこの方法を用いまして(F え)文章構造の認定を実際に行なってみたいと思います。

(A02F0082)

では、このような「えー」はどのような背景を持っているのだろうか。「あの一」と比較しつつ、この点を検討する。

23 えー [1]、今回は、第四回、えー [2]、海への思いと、えー [3]、いうことで、散歩するわけなんですけれども、あの一、テキストのうしろの方に、あの一、地図がございまして、えー [4]、ちょっとその地図を開いていただきたいと思います。えー [5]、その中に、えー [6]、横浜マップというのがあります。横浜を、こー、散歩するわけなんですけれども、えー [7]、どこを散歩するかということ、この地図を見るとある程度おわかりになるんじゃないかと思います。(井上謙「横浜湘南を歩く」NHKカルチャーアワ

ー 2006.10.29 放送)

23 では、「あの一」は、「テキストのうしろの方に地図がございまして」という発話文の直前と途中に現れている。その他の部分では、「えー」が使われており、「あの一」と「えー」で何らかの使い分けが行われていると考えることができる。

この「テキストのうしろの地図を見てください」という発言は、聞き手への要求であり、この談話にとっては、挿入的なもので、本来のものから外れるものである。

このような挿入をする場合、たとえば、講演の途中に、部屋が暑いので窓を開けてほしいという要求を聞き手にする場合、自身の発話内でも、割り込みが行われるときには「あの一」が現れ、「えー」は出現しない。

24 今日は〇〇についてお話します。{\*えー／あの一}、すみません、窓を開けていただけませんか。

講演という言語行動の中にあっては、聞き手に行動を要求するということは、通常のことでない。異質なものである。このような異質なものを取り込もうとするとき、言語行動としては、割り込みという形で行うのが一つの方法である。

「あの一」のこのような割り込み性は、「あの一」の持つ始発性に由来していると思われる。「あの一」は、「あの一、すみません」など他者への呼びかけにも使われるが、そのような意味での始発性である。始発したのちの方向は、話し手に委ねられていて、聞き手には予想はつかない。そのことが、「あの一」の始発性の特徴であり、このような始発性を持つゆえに、割り込みの際に「あの一」という語が現れるので

はないかと思われる。<sup>x</sup>

それに対して、「えー」は場面そのものの開始性は持っていない。「えー」と言って談話が開始される以前に、すでに談話の場は開かれているのである。

このように考えると、23の「あの一」は、そこで一種の割り込みが行われるという意識の現れと見ることができよう。また、23の「えー」[4]は、「あの一」で開始された話題の中にあるようにも見えるが、談話の本来のラインへ復帰しつつあるという意識、「えー」[5]は復帰したという意識の反映である。そのあとに「あの一」が出現していないのも、そのためだと考えられる。

この、23の「あの一」と「えー」の異なりについての観察は、次の25についても当てはまる。

25 2 : (...) あの一、えー、兄が今、たまたま、あの、研・・・ま、兄も大学の（1：うん）、あの、しゅ、教員なんですけれども、あの、研究機関で、えー、ドイツにおりまして（1：はい）、あの一そちらに少し（1：あ一）、まあ、遊びについていたら語弊がありますけれども、（1：うん）訪ねて、えー、行ってみようかなと思っております。（TOm）

この発言の中心は、「兄が今たまたまドイツにおりまして、訪ねていってみようかと思っております」という部分であろう。その部分は、「えー」でマークされている部分をたどることによって得られる。それに対して、「あの一」「まあ」は、おおむね、補足的な情報（兄の職業）、表現について注釈（「遊びに行く」の適切さ）の部分に現れている。

「えー」は、「あの一」のように、談話の途中

に、行動要求を割り込ませたり、個人的な注釈、補足が挟み込まれたりというところには現れない。ここまでの観察に従えば、談話の予定されたラインというものがあって、そのラインに添っていると意識される内容の展開が行われるときに現れるということになる。そのような意識が、22に見たような「えー」の頻出の背景にあるのではないかと思われるのである。

また、ラジオでの講演は、公的なものではあるが、国会での発言のような高度の公性は持たず、また内容的な自由度も高い。このような場での発言の場合、出現位置の制約が弱められ、頻出することになるのではないかと考えられる。これは、22、23、25の例、いずれについても言えることである。

ここまで、「えー」の出現位置の特徴を観察した。ここまででの観察を総合すると、その共通点として次のようなものが挙げられよう。

#### 26 「えー」が現れる条件、現れる位置

「えー」は、談話のプランに従って、また、話者のコントロール範囲内で、談話が進行している場合に現れる。公的性が高い場合は、談話内での行動、話題、内容の推移するところなど、談話にとって有標な推移点に現れるが、公的性が下がり自由度が増すと出現位置の有標性は低くなり、位置についての制約は弱くなる。

### 3. 「えー」の出現する談話の性質

前節では、「えー」の出現位置についてみてきたが、次に、「えー」が現れる談話の特徴を考えてみたいと思う。ここでは、前節の観察をもとに、次の4点を挙げる。

#### 27 「えー」が現れる談話の性質

- ①公的な場面での談話である
- ②発話内容には話し手に委ねられた自由度がある
- ③発話権は話し手にあり、聞き手は話し手の話を待ち受けている
- ④発話内容は事前に準備され、一定のまとまりを持っている

①～④のうち、①～③は、場面の性格付けにかかわるもので、①は場面の公式／非公式性、②拘束／自由性、③発話権の占有性である。また、④準備性は、談話の内容にかかわるものであり、前節で触れた(26)が、さらに検討を加える。

以下それぞれについて順に述べる。

#### ①「え」と公式性

—「えー」は公式性の高い場面に現れる—  
公式性の高い談話とは、その手続き、参加者の役割などが、社会的に決められている談話のことであり、その談話の中で個人としての側面が排除される度合いの high で談話のことであると、この稿では考える。

公式性の高いコミュニケーションの例としては、国会本会議での代表質問、学会発表、講演、儀式でのスピーチなどが挙げられよう。これらは、社会的な約束事によって言語行動が行われる。これに対して、家庭での会話、休憩中に同僚や同級生と交わす会話は、社会的な約束事の少ないものであり、公式性の低いものとすることができよう。

この公式性の度合いによって、出現するフィルターにも異なりが生ずると予想される。たとえば、「もう」は、日常会話での出現頻度は高いが、講義や会話ではほとんど現れず、逆に、「その一」は、日常会話にはほとんど現れないとされる(Nagura 1997)。「えー」も、公式性がある

程度高い談話でないと現れないようであるが、しかしまた、2-1 節①で述べたように、公式性が非常に高くなると出現が少なくなるという傾向も見られる。

では、なぜ、公式性と「えー」とが関わるのか。

電話会話では、「あつ、△△さんですか」などのように、相手を認定したときに「あつ」という語の現れるが、しかし、親族からの電話の場合は、相手認定がなされても「あつ」が現れないと言われる(岡本・吉野 1997)。つまり、何らかの言語表現を開始する場合に、直接すぐに始めてよいかどうかに関して、一定の制約があることが想定される。国会本会議での委員長報告などに見られるように<sup>xi</sup>、発言冒頭の「あつ」は、その直接性を避けるための一つの手段になっているわけである。

「えー」にもこのような役割があるように思われる。直接的な開始の回避である。もちろんこれは無意識的に行われるものであるが、社会的な要請による行動の一つと見ることができるだろう。

公式性というもののの中では、話の開始の仕方についての約束事は重要なものと思われる。何らかの合図なしに始めてよいかどうか、談話によって、その約束事が異なるのだらうと思われる。

「えー」と言わなければ開始できないわけではないが「えー」が場面によって出現したりしなかったりするということは、場面からの要請というものと「えー」とが関わっているということになる。

もう一つは、よく指摘されることであるが、発話者の内容形成のための余裕作りということがあるだろうと思う。しかしこの場合の内容とは何かというと、言語的な内容のみに限られるものではない。2.2 節でふれたように、発話行動をする場合に、話し手が対応しなければな

らないことは、言語表現だけではない。2.2 節で挙げた例（19、20）では、用意した文書の読み上げの際に、記号の読み方をどうするかというようなことも問題になるし、また、発表の際に機器の取り扱いに戸惑うというようなことも起こるわけで、そのような際には、時間的空白を避ける工夫が必要になって来る。丹羽ら（2004）によれば、2 秒以上の空白は、談話の途切れと感じられるという。このような空白をフィラーによって避けるわけであるが、その場合にも、選択肢はいくつかある。たとえば、「あの一」「えー」のどちらでも出現可能な状況というものがあるかもしれないし、交代可能な場合がほとんどかもしれない。実際、伊藤ら（1998）では、フィラーの入れ替えをした音声を聞かせても違和感がないという反応だったことが報告されているが、その中で「えー」が選ばれることがあるとすれば、その一つの要因は、「えー」の持っている公式性だと思われる。

## ②「えー」と自由度

—「えー」は、公的性は高いが、  
一定の自由度のある談話に現れる—

次に、自由度（あるいは拘束性）であるが、畠（1985）によれば、談話の目的、話題、参加者の役割、談話の手続きなどがあらかじめ決まっているかどうかということである。

この観点から言えば、拘束性の高いものは、儀式でのコミュニケーション、例えば、裁判で証人になる場合の宣誓、ファスト・フード店での店員の受け答えなどが挙げられるだろう。定時ニュースでは、話題は変化するが、内容に関する自由は、話し手にはない。落語や演劇など、あらかじめ決まった表現が存在するものも、多くの場合、拘束性は高い。

そのような談話に「えー」が現れることは少ない。というのは、「えー」は、話し手の発話処

理状態を背景に出現するものであり、「えー」の使用は、話し手自身の状態、つまり、私的なあり様を談話に持ち込むことになるからだと思われる。

また、その場合の「処理状態」とは、一種の停滞であり、内容について十分に消化していないことを示すことでもあり、そのために、公式性、儀式性を損なうことになるわけで、当の言語行動の目的からは避けるべきものとされるからでもあるだろう。

「えー」は、だから、そのような話し手の個人的な状態の表示がある程度許されるような場面に現れるものである。国会演説など、演説で原稿を読んでいるにもかかわらず「えー」が出現することがあるが、これは、その原稿が演説者個人の発想に基づいているという意識が背景にあるからだろう。また、同じニュースの中でも、話題がスポーツに移るところでは、「えー」が現れる例を挙げたが（例 21）、一字一句厳密でなくてもよいという気楽さがスポーツニュースには許されている、ということの現れではないかと思う。

## ③発話権の占有

—「えー」は発話権を占有している  
話し手の談話に現れる—

次は、発話権についてである。発言権のない参加者が、発言を開始するときには、前にも述べたが、「あの一」などが現れ、「えー」は現れない。発言権のない話者が話し始めるときには、話に割り込んだり、あるいは、相手に呼びかけて注意を引き付けたりというようなことをする必要はあるが、「えー」にはそのような機能がない。

つまり、「えー」は、発言権獲得の過程に現れることはなく、発話権がすでに話し手に保持されているという状態において現れるということ

になる。談話の冒頭に現れるのは、それはすでに発言権が認められているからである。

CSJ のデータにもあるように、学会発表などで「えー」が多くなるのは、このような発言権の占有性があるからであると思われる。

畠 (1985) は、場面の性格記述に、直接場面／間接場面という区分を提案している。この区分は、参加者が場面を共有し、直接やりとりを行うかどうかという区分である。対面で話したり、電話で話すというのは直接場面、手紙やメールなどは間接場面となる。この区分からすると、CSJ に採られている学会発表などは、場は共有されているが、参加者同士が話し合うことは限られているもので、岡本 (2000 : 59) が言うように中間的なもの、いわば半間接場面である。このような場面では、発話権は、ほぼ講演者に占有されていて、質疑応答があるとしても、それは、発表者のコントロールに従うことになり、発表者の発言権は安定して認められている。

「えー」は、発話権に関してこのような状況に現われる。

#### ④発話の準備性

—「えー」は発話内容についてなんらかの準備性のあるところに現れる—

「えー」が現れる談話を見てみると、その内容について、なんらかの準備があるときに現れている。文書の読み上げ、落語、研究発表の冒頭など、いずれも用意したものについて、これから話すというところに現れているからである。

「えー」が出現する背景には、この「準備されている」ということが重要な要素として存在するように思われるわけである。ただし、ここでは、この準備性という概念をかなり広く捉えている。次の 28、29 では、特に内容が事前に準備されていたとは考えられないが、これらも含

めて準備性という枠で捉えようと思う。

28 1 : 宮本輝さんって言うのはどういう作家ですか？

2 : えーだいたい同年代 40—もう 50 に近いぐらいの男性なんですけれども

1 : はい。 (YS f)

29 1 : んん、例えば具体的に今こうだから、こういうことが何とかならないかっていうようなことを考えていらっしゃるんですか？

2 : /—エー、とくにないです。(YM f)

28 の話者「2」の発話は、内容についての準備があったわけではないが、しかし、この場面では、自分の知っている範囲の事柄、自分の領域内の知識について語ればよいという立場にいるわけである。また、29 でも、単に応答するだけであるが、その冒頭に「えー」が現れた背景には、自領域内を探索した結果、「とくにない」という応答が生まれたと考えることができよう。いずれの場合も、自分の領域内にあらかじめ存在しているとみなしうるという意味で、準備性という枠で括っておくことにする。

この準備性は、公式性が高くなるほど話し手に求められるものであり、公式性と関連するものである。また、準備性が高くなるということは、談話としての完結性も高くなるということであり、これらの性格と「えー」の出現が相関することは、落語、講演などの冒頭部の「えー」が示している。

#### 4. 先行型フィラーと後続型フィラー

##### 4.1 先行型フィラーと後続型フィラー

ここまでは、次の例のように、何かに先立って現れる「えー」を中心に検討してきた。

1 えー、酒百態と申しまして、酒飲みにもいろいろ癖のあるものでございます。(再掲)

このような「えー」に対して、母音延引型のフィラーには、ある単位に後続して現れるものがある。30の[1]～[4]のフィラー「あー」「おー」などがそれである。たとえば、「あー[1]」は、その直前の「一つは」の「は」の母音を引き継いだものである。「おー[2]」も同様に、直前の「ですけども」の「も」の母音を引き継いだものと考えられる。

30で(F その)抽象化の手法なんですけども<咳>(F ま)一つは(F あー) [1] 均等深度法と(F ま)(F あ)の大袈裟な名前ですけども(F おー) [2] (F まー)あるルートの概念から深さが(D い)ある定数(A ディー;D)以上である概念を(F お) [3] 深さ(A デー;D)の(F おー) [4] 上位概念に抽象化してしまうと。(A03M0005)

ここで、仮に、1の例に見られるようなものを先行型フィラー、30の例を後続型フィラーと呼ぶことにする。

この2つのタイプには、まず、次のような違いが指摘できる。

ひとつは、後続型はその形式の由来となる語を持つが、先行型には、そのような語がないという点である。

ふたつ目は、後続型では基本的には「あ・い・う・え・お」の5母音が可能であるが、それに対して、先行型の母音は限られているという点である。CSJでは、ほぼ「えー」のみで、他の母音はない。「う」で始められているものもあるが、それも先行文の文末「～です」の母音を引

き継いだものと見る事が可能であり、先行型フィラーの形としては、「えー」のみであると言ってもよいと思われる。

ところで、このような後続型フィラーと類似の形式がある。それは、語末の最終音節が延引される話し方で、やや古い用語になったが、かつて「全共闘演説口調」<sup>31</sup>と呼ばれた話し方である。例えば、「われわれは一、あした一、・・・」というような話し方である。

これは、後続型フィラーとは、次の点で異なる。

31 a. ポーズ介入：「全共闘」型は母音の延引は句末の音がポーズなしに延引されるものであり、音節としてのまとまりを持つが、フィラーの場合、その前にポーズが置かれる。

b. 音高の保持：「全共闘」型は延引部分にアクセント核があり、「われわれは一ー」となる。それに対して、母音形フィラーでは、前の句の音高が保持される。つまり、その句についてポーズを置かずに発音すれば、同じ高さで延引されていることになる。

## 4.2 後続型フィラーはなぜ出現するか

以下、後続型フィラーの現れを見て、その性質について、問題を提起しておくことにしたい。次の例は、衆議院予算委員会での大臣の答弁である。なお、①・②という数字は、検討のため付けた文番号である。32と33の①②は対応している。なお、余談だが、ここには5母音すべてについて後続型のフィラーが現れている。

32 金子一義大臣：おー、数字を、おー、お、まとめていただきまして、え（で？）、あの一、予測を出してもらいました、あー、

結果であります。

①えー、その結果、あの、今回、えー、  
めりはりをつけさせていただきまして、  
えー、日曜日、土曜日、祝日は、あー、  
どこまで行っても千円、えー、平日は、  
あー、へい、平日は、あの、昼間 3 割、  
いー、夜間 5 割引、あの一、お、これ  
は、物流コスト、の、削減を、お一、目  
的とする。

②（吸気）あの、以上、これ、え、を対  
策を採りまして、（吸気）えー、一方で、  
あの一、大事なことは、45 年の、お一、  
道路、お一（うー）高速道路の、お一、  
償還財源 40 兆、あの、これは、あー、40  
年、40、うー、45 年で、えー、きちんと、  
お一、返／済していただくという、（吸気）  
枠組みの中で、実施をさしていただいてお  
ります。（衆議院予算委 2009 年 2 月 20 日）

この例から、フィラーを除くと次のようになる。

33 数字を、まとめていただきまして、（で？）、  
予測を出してもらいました結果であります。

①その結果、今回、めりはりをつけさせて  
いただきまして、日曜日、土曜日、祝日  
は、どこまで行っても千円、平日は、平  
日は、昼間 3 割、夜間 5 割引、これは、  
物流コストの削減を目的とすると。

②以上、これを対策を採りまして、一方で、  
大事なことは、45 年の道路、高速道路の  
償還財源 40 兆、これは、40 年、40、45  
年で、きちんと返済していただくという  
枠組みの中で、実施をさしていただいて  
おります。

ここで①、②の統語性に注目してみると、ど

ちらの文も、ネジレを含んでいることがわかる。

②などは、内容的にも一貫性がないようにも感じられる。

しかし、それは、発話はいつも統語的に整ったものである（べきだ／はずだ）という先入見によるものなのではないかとも思われる。文の生成に当たっては、結果として文となることはあっても、必ずしも統語的適格文として結果するとは限らない。それは、生成過程では、心内で、さまざまな内容的編集が行われるからであろうと思われる。そして、そのような編集作業をするためのスペースが、発話文の途中に現れるとき、後続型のフィラーが現れ、文の形成のための心的な余裕を確保するための休止として働くということなのではないかと思われる。

衆議院ビデオライブラリで、32 の発話を実時間的に聞いているときには、停滞感はあるが、ネジレ感はない。それは個人的な感じ方に過ぎないかもしれないが、フィラーの位置で、その先の統語的、内容的な展開に複数の可能性が生じており、ネジレの感覚が緩められていたからではないかと思われる。結果として見れば、統語的適格性の低い発話文ということになるが、そのような統語性の低さは、フィラーによってもたらされたわけではない。発話の構造が変更されたために起きたことであると思われる。

後続型フィラーは、空白を回避しつつ、心的スペースを作るという役割を、結果として果たしていると考えられる。まとめると次のようになろう。

34 a. その先の発話内容の確認、形成のスペースを作る。

b. 発話が継続していることを示すために、無音状態を回避する。

また、このような機能を果たすための語形として、もっともニュートラルな語形が直前の母音ということになるのではないと思われる。他のフィラーが現れる場合は、また別の心的な活動があるはずである。後続型フィラーは、ポーズは介入しているが、語としての連続性を持ったものと見ることもできるわけで、その点では、別の要素の介入を避ける方法でもあるわけである。

これに対して、先行型「えー」は、談話や文の構造、内容的な展開など、発話のプランと進行についての意識が、実時間的に現れているものと言えるのではないか。後続型にはない、いわばマクロな談話行動への意識ともかかわっているのだと思われる。後続型、先行型で、かわる単位が異なっていると思われる。文の処理にかかわっているゆえに、文の中に現れる。後続型「えー」は、目下処理中の文の形成に処理資源が使われている状態において出現するのではないと思われる。

## 5. まとめ

本稿が目指したことのひとつは、小出 (2008) で「えー」について対話データ (HCSJ) 観察したことが、独話データ (CSJ) についても妥当するかどうかを検討することであったが、対話データをもとにした「えー」の出現条件に関する観察は、独話データにおいても妥当するものと考えることができた。が、小出 (2008) では個々の条件について十分に検討されていないという点で問題があり、今回はその不足を補う形になった。今回の観察を改めてまとめると次のようになる。各節でまとめを行ったもの (26、27) を再掲する。

・「えー」が現れる条件、現れる位置

談話のプランに従って、また、話者のコントロール範囲内で、談話が進行している場合に現れるものであるが、公的性などが高い場合は、談話内での行動、話題、内容などが推移するところなど、談話にとって有標な推移点に現れるが、公的性が下がり自由度が増すと出現位置の有標性は低くなり、位置についての制約は弱くなる。

・「えー」が現れる談話の性質

- ①公的な場面である
- ②発話内容には話し手に委ねられた自由度がある
- ③発話権は話し手にあり、聞き手は話し手の話を待ち受けている
- ④発話内容は事前に準備され、一定のまとまりを持っている

また、先行型フィラーと後続型フィラーについて、後続型は当面の発話処理のためのスペースづくり、無音の回避（発話権の保持）にかかわるが、先行型は、談話のプラン全体とのかかわりまでを含んだ話者の意識に連動している可能性を指摘した。

この稿では、どこにどんなときに現れるかという、いわば状況証拠を集めることによる検討を行ったが、なぜ「えー」なのか、なぜ「えー」が現れるのか、という核心に迫るには、また別の方法（たとえば、実験的な方法）が必要だろうと思われる。今後の課題としたい。

### <注>

- <sup>i</sup> 五代目柳家小さん『禁酒番屋』（1981年3月17日、東京落語会録音）NHK
- <sup>ii</sup> 小林章夫「20世紀イギリス文学の世界」NHK カルチャーアワー2007.6.25 放送
- <sup>iii</sup> A03M0005などの記号は、CSJのデータ記号を示す。
- <sup>iv</sup> なお、CSJには70例収められているが、冒頭から採録されているか判断がつかなかったものを除いた。全部

- で 59 例である。表中の「φ」は、フィラーが現れていないことを示す。
- <sup>v</sup> このデータは、『衆議院 TV』の「ビデオライブラリ」と、『国会会議録検索システム』それぞれの 2009 年 6 月分を検索して得られたものである。
- <sup>vi</sup> なお、2009 年 7 月では、衆議院本会議は 5 日開催されたが、本会議演説で、「質疑者・説明者」の中で、冒頭に「えー」が出現した話者はゼロだった。審議時間が合計で 3 時間足らずと短かったせいかもしれない。
- <sup>vii</sup> 各種委員会の委員長が、委員会の議論を報告するもの。
- <sup>viii</sup> また、「衆院 TV」の画面を見ると、登壇し、発声を始める前に口が動いている話者もいる。しかし、その場合でも声は出ない。その同じタイミングで「えー」ということも可能だと思われる。このような現象を見ると、「えー」は、発声のための準備運動の一つでもあるのだと思われる。
- <sup>ix</sup> ここで音読が行われていると判断したのは、例 18 では CSJ のスクリプトの注記から、19 では、「衆院 TV」の映像からである。
- <sup>x</sup> CSJ のデータでは、「あの一」の出現数が「えー」より多いという話者は少数で、多くの話者は、「えー」のほうが多い。「あの一」がほとんど現れない話者について、「あの一」がどのような所に出ているか、いくつか例を挙げる。
- 1 (F え)ここで大変申し訳ないんですが(F え)予稿集八十七ページ(F あの一)訂正をお願い申し上げます。(A02F0082)
- 2 で実験結果なんですけれど<雑音>(F えっと)これでも 予稿集の(F あの一)後ろの(F えー)グラフを見ていただくと<雑音>大体の傾向が分かると思うんですけど、(...) (A05F0043)
- 例 1 の話者は、「あの一」をこの 1 回しか使っていない。ここでも、23 と同じく、聞き手への要求の前に現れている。例 2 の話者も「あの一」が 2 例しかない。これも 23 と同じく、資料の参照を求めるところである。このように、聞き手に対して、なんらかの要求をするときに「あの一」が出現するという現象は、他の例でも見られることである。
- <sup>xi</sup> 2.1 節の区分①で、国会本会議での委員長報告の様子について触れた。
- <sup>xii</sup> 『現代用語 20 世紀事典』(現代用語 1998 別冊 自由国民社)

#### <参考文献>

- 伊藤敏彦・峯松信明・中川聖一 (1998) 「間投詞の働きの分析とシステム応答生成における間投詞の利用と評価」『日本音響学会誌』55-5 : 333-342

- 岡本能里子・吉野文 (1997) 「電話会話における談話管理ー日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析ー」『世界の日本語教育』7 : 45-59.
- 岡本真一郎 (2000) 『ことばの社会心理学』ナカニシヤ出版
- 塩沢孝子 (1979) 「日本語の Hesitation に関する一考察」(F.C.パン編『社会言語学シリーズ No.2 ことばの諸相』文化評論出版社 : 151-166
- 杉藤美代子 (2004) 「自然な対話における非文法的な発話のプロソディと聴き手の理解」『文法と音声 IV』(音声文法研究会編) くろしお出版、281-297.
- 丹羽啓二・佐川雄二・杉江昇 (2004) 「自然発話中の冗長語区間検出に関する研究」『情報処理学会研究報告』IPSJ SIG Technical Report、2004-NL-159 : 107-113
- 畠弘己 (1985) 「いいよども語 アノーとエーによる談話の類型化」『国語学』141 要旨
- Nagura, Toshie (1997) “Hesitations (discourse markers) in Japanese.” 『世界の日本語教育』7 : 201-218